

# 詩人の足跡

——エミリー・ディキンソンの書簡を読む——

松 本 明 美

**Synopsis:** This study examines Emily Dickinson's letters or epistles in order to ruminate over the materials of her life that have not been considered significant so far. More than 1,000 letters belonging to Dickinson have been discovered; she wrote to her siblings, relatives, close friends, acquaintances, and so on. In particular, her illegible letters offer us an insight on the course of an independent poet, which she followed almost all her life. Some of her correspondences reveal an exchange of letters between Dickinson and T. W. Higginson, who gave her some advice on poetry. There are also references to poets and writers whose works she read closely. Moreover, her letters teach us her philosophy of poetry and offer clues to solving the mystery of her life. In this way, Dickinson's letters are proof that she lived as one of the admirable poets in the history of American poetry and her letters, like her poetry, will continue to be appreciated by readers forever.

## I はじめに

アメリカを代表する詩人、エミリー・ディキンソンは、1,800編近くの詩を書き残したことで知られている。ディキンソンは、生前中の詩集の出版を断念したものの、生涯を詩人として書き続けることを選んだ。同時に、私生活においては、自分の家族やごく親しい友人、それに信頼する知己とだけ交流することを決めていた。このように、ディキンソンにとって、敬愛する人々には多くの書簡を送り、自作の詩を贈ることもあった。

ディキンソンの詩のスタイルについては、圧縮されて無駄な表現が省かれ、ダッシュを多用するなどの特異な作風が特徴である。それゆえ、読者は彼女の詩を読み解くのに苦勞をする。しかしながら、今ではそれがディキンソンの詩の魅力の1つとなって、世界中で多くの読者を獲得している。詩の言葉の一つひとつが際立ち、圧縮された表現となっているため、複数の解

釈を可能にしている。そのため、これまで多くの研究者がディキンソンの詩の全貌を多角的に研究して、多くの研究書が出版されている。逆説的な言い方をすれば、ディキンソンの詩の研究が一定の落ち着きの段階にたどり着いた、とも言えるのである。

しかしながら、ディキンソンがものを書く天才としての資質を顕在させるもう一つの素材がある。それは、彼女の書いた手紙、いわゆる書簡である。この書簡については、本論の冒頭で言及したが、ディキンソンは書簡をほとんど生涯にわたって書き続け、しかも多くの人たちに書き送っている。現在では、1,000 通以上の書簡を読むことができるが<sup>1</sup>、彼女の書簡のすべてを読み切るとは至難の業である。書簡によって、長いものや短いものなどいろいろではあるが、彼女の書く独特な言い回しや感情の揺れが混在しているため、読解するには困難な作業が強いられる。しかし、ディキンソンの書簡からは、若い頃から円熟した壮年期に至るまで、当時の交流関係に留まらず、詩人としての心の変遷などを読み取ることが可能である。特に注目すべき点は、詩人としての葛藤や彼女自身の意志を言葉で書き表している点である。とりわけディキンソンと言えば、神秘的なヴェールで覆われた女性詩人というイメージがあるが、彼女の性格や外見の様子なども、書簡から伝わってくるため興味深い。さらに、ディキンソンと同様に、同時代の多くの作家や詩人たちもまた書簡を書き残しているが、それは作家や詩人たちにとって、書簡がいかに重要であったかが理解できる。当然、21 世紀の現代と 19 世紀では、コミュニケーション手段の質に大きな差異があることは否めない。それだからこそ、特にディキンソンが生存していた時代には、書簡の重要性が増してくるものと考えられる。やはり、ディキンソンも人と人を結ぶ大切な手段である書簡に大きく頼っていたことは、想像に難くないのである。そして、そこからとおして見られる生身の人間としてのディキンソン、そして詩人としてのディキンソン像までが見えてくるのである。

そこで、本論では、ディキンソンが詩人としてどのように自己を確立していったのかを、特に重要だと思われる書簡を読みながら検証していきたい。そのために、詩人としての一面が色濃く読み取れる書簡や詩を選ぶことで、

ディキンソンが詩人として確立していく足跡を読み取ることにする。さらに、書簡に登場してくる人物たちにも言及することで、彼らがディキンソンにどのような影響を与えたのかも考察する。最終的には、本論の最後で、ディキンソンの詩だけではなく、書簡にも光を当てる意義をまとめることにする。

## II 詩人への目覚め

ディキンソンが才気煥発な少女時代を経て、次第に父親の屋敷に隠棲し、特定の縁者や知己とのみ交流を重ねていたことが伝記的な事実として知られている<sup>2</sup>。ディキンソンは、彼女の父親がアマーソンの名士であったため、なにに不自由なく生活を送ることができた。彼女の家柄であれば、華々しい交流関係を築けたものと推測できるが、彼女はそのような生き方を選ばなかった。つまり、家事をする以外はほとんど自分の部屋に閉じこもり、詩と書簡をひたすら書き続けていたのである。それは、書簡をやり取りすることが彼女にとっていかに重要であったかを示している。無論、書くだけでなく、受け取った便りを読むことも好きだった。自分が書簡を書き送った後、その返事が戻ってくるのをどれだけ待ち遠しく思っていたか、想像に難くない。それは、ディキンソンに限らず、古今東西多くの人々が体験することであろう。とりわけ、ディキンソンはペンを執ることに傾注してきた人であるだけに、書簡のやり取りが長く続くことを期待していたに違いない。そのことを証明する 1 編の詩がある。まずは、ディキンソンの詩を引用しながら考察したい。

The Way I read a Letter's — this —  
'Tis first — I lock the Door —  
And push it with my fingers — next —  
For transport it be sure —  
  
And then I go the furthest off

To counteract a knock —  
 Then draw my little Letter forth  
 And slowly pick the lock —

Then — glancing narrow, at the Wall —  
 And narrow at the floor  
 For firm Conviction of a Mouse  
 Not exorcised before —

Peruse how infinite I am  
 To no one that You — know —  
 And sigh for lack of Heaven — but not  
 The Heaven God bestow — (Fr 700)<sup>3</sup>

語り手の「私」が、自分の「手紙の読み方」はこのようなものである、と解説している詩である。「初めに、ドアに鍵をかけ」、「次に指でそれを押してみる」と書かれている。そして、「ドア」のノックが聞こえないように、部屋に入ってそこから最も遠い場所へ行くのである。そこまでするのは、書簡を読んでいる最中に誰にも邪魔をされたくないからである。さらには、「壁」や「床」、「鼠」にも注意を払うほどの用心深さである。「手紙」に穴が開くぐらいに読みとおすことによって、語り手は、「私はなんて無限なのだろう」とさえ思うのである。しかし、最後のスタンザにあるように、期待するような内容でなければ「天国がないとため息をつく」のである。

この詩が示しているのは、語り手の行為と同様に、書簡を愛おしそうに読むディキンスンの姿である。言わば、「私」が、ディキンスンの姿と重なって見えるのである。この詩の場合は、よほど待ち焦がれた返信が送られてきて、それを大事そうに読むディキンスンの様子が窺えるのである。さらに、書簡には、自己の「無限」さを感じさせる魔法があるかのように書かれている。この詩では、「鼠」が出てくるなど、多少大げさで滑稽な調子で描かれてはいるが、ディキンスンの書簡好きの一面が見られる、興味深い詩である

と言えよう。

ここからは、ディキンソンの書簡を中心に、考察を進めていきたい。ディキンソンが書簡の重要性を、自らしたためた書簡の中で記述しているものがある。その書簡は、ディキンソンが師と仰ぐ人物宛に送られた。伝記的事実として、批評家であり、編集者であった T. W. ヒギンソンが、『アトランティック・マンスリー』という雑誌の中に寄稿した「若い投稿者のへの手紙」という記事をディキンソンが読んで、そのことがきっかけとなって、彼と文通することになったという事実はよく知られている。ディキンソンとヒギンソンとの文通については、本論でも後に取り上げていくが、その書簡の中の 1 通で、ディキンソンは書簡の重要性を述べている。まずは、その 1 節を引用する。

A Letter always feels to me like immortality because it is the mind alone without corporeal friend. Indebted in our talk to attitude and accent, there seems a spectral power in thought that walks alone — (L 330 ; June 1869)<sup>5</sup>

書簡は、ディキンソンにとって「不滅」そのものであり、「肉体的な友を持たない精神だけ」なのである。ディキンソンは、生涯のほとんどをアマーストで過ごし、よその土地へ出掛けることは滅多になかった。だから、自分の思いを誰かに伝えるには、書簡だけが頼りだったのである。この 330 番の書簡は、ディキンソンの書簡の重要性を証明する上で看過できないものである。ヒギンソンが、会うことを求めたり、写真を送るように求めたりしても、ディキンソンは簡単には受け入れず、「精神」そのものである書簡という手段を行使し続けた。

ディキンソンがヒギンソンに書簡を送ろうと思ったのは、彼が書いた記事や文章に共感を得て、大きな刺激を受けたからである。思想においても、ヒギンソンと通じるところがある、とディキンソンは感じ取ったのだろう。それゆえに文学、特に詩に関して論戦を行いたかったに相違ない。詩人という書き手としての一步を踏み出すためには、尊敬する誰かに自作を読んでもらってなんらかの助言や意見を請う、つまり、客観的な視点からの意見を求め

たくなつたと推測できる。おそらく、ディキンソンのことであるから、ヒギンソンにそのような書簡を送るべきかどうか、長い時間をかけて逡巡したことだろう。そして思い切って、ようやく書簡を送ることとなったのである。ディキンソンの心の中では、自信と一抹の不安が錯綜していた。そのような心の葛藤とある種の決意がない交ぜになって、次の引用にあるような彼への初めての書簡を書いた。その書簡の中には、ディキンソンの大きな心の振幅が見てとれる。

Are you too deeply occupied to say if my Verse is alive?

The mind is so near itself — it cannot see, distinctly — and I  
have none to ask —

Should you think it breathed — and had you the leisure to tell  
me, I should feel quick gratitude — (L 260 ; 15 April 1862)

この書簡は初めから唐突に、「大変お忙しいとは存じますが、私の詩が生きているかどうか言っていただけますか？」と尋ねている。この書簡から、ディキンソンが何編かの自作の詩を送ったことは明白だが、「私の詩が生きているかどうか」という尋ね方は、少々生々しい。詩そのものが、まるで心臓を持つ人間のように例えられている。詩のどの部分が良いか悪いのかという細かいことよりも、詩全体が価値のあるものかどうかを、ディキンソンは問いたいのである。

ヒギンソンに対して、師となってくれるように書簡で頼んだディキンソンではあったが、順調なやり取りとはいかなかったように考えられる。なぜなら、ディキンソンには秘めた自信とプライドが内在していたように思えるからである。師と定めたヒギンソンに尊敬の念を示してはいるが、すでに 30 歳を超えて自宅にこもり出す生活を始めるなど、我が道を極めつつあるディキンソンである。心の内には、詩人としての自意識が芽生え、自分の詩のスタイルや思想なども確立しているだろう。結局、本論のⅠ章で述べたような、ダッシュや奇抜なメタファーなどのスタイルを生涯貫き通すわけである。言わば、ヒギンソンと文通をとおして知り合った頃には、すでに詩人としての円熟期を迎えつつあったのである。しかし、一方のヒギンソンは、助

言を求められた限りには、それなりの対応をしなければならないと心得ている。当然、ディキンソンと意見の対立が少しずつ見られるようになってくるのである。そのような状況が見えてくる書簡を引用してみたい。

I smile when you suggest that I delay “to publish” — that being foreign to my thought, as Firmament to Fin —

If fame belonged to me, I could not escape her — if she did not, the longest day would pass me on the chase — and the approbation of my Dog, would forsake me — then — My Barefoot — Rank is better — (L 265 ; 7 June 1862)

この書簡を読むと、ヒギンソンはディキンソンに「出版を遅らせる」ように提案したことが分かる。その真意はここで明らかにされてはいないが、おそらくディキンソンの詩が、当時の整った韻律などを持つ詩風と大きく異なるスタイルをしていたからだだろう。それに対して、ディキンソンが感情的な反応をあからさまに示すというよりも、書簡の中で、詩集の出版は、「魚にとっての天空」くらいに縁のないものと反駁している。ディキンソンはこうしてヒギンソンの考え方を、一笑に付したわけである。そして、次の段落のところでは、「裸の階級の方が良い」とディキンソンらしい表現で、対抗している。つまり、ディキンソンにとって出版することへの「名声」は、自分とは無縁のものであって、「名声」を得たことによって着飾っているような人間にはなりたくなかったということである。

さらに、ディキンソンはヒギンソンに対して、誠実ではあるが要求には素直に応じないとする一面が見られる書簡があるので、一部を引用してみたい。

To T. W. Higginson

Could you believe me — without? I had no portrait, now, but am small, like the Wren, and my Hair is bold, like the Chestnut Bur — and my eyes, like the Sherry in the Glass, that the Guest leaves — Would this do just as well? (L 268 ; July 1862)

ヒギンソンは、ディキンソンに余程興味を抱いたのだらう。書簡と一緒に写

真を同封するように要求していたことが、最初の疑問文から感じ取れる。ディキンソンは、写真の代わりに言葉で自分の容姿を説明している。彼女は、「ミソサザイ」のように小さくて、「髪」は「栗のいが」のようだと述べている。目に関しては、「お客様が残していくシェリー酒のよう」だと透明感のある瞳を想起させる。まるで、肖像画を描いているかのような趣である。ディキンソンが写真を送らなかったのは、恥かしさもあっただろう。逆に言えば、言葉で対象を表現できるという自負が、ディキンソンにはあったのだ。

こうして、ディキンソンは30代初めにして、師と仰ぐ人に書簡を通じて出会えたのである。しかし、ディキンソンに、ヒギンソンから肯定的な色よい返事は多く返ってこなかった。それだけに、内心、反発を覚えるものの、ますます自分の詩の世界を構築する方向へと向かったのである。出版して多くの読者を得るという喜びよりも、自分自身だけを頼りに邁進するしか方法がないことを認識した。ヒギンソンへの尊敬と反骨心の両方が、詩人、エミリー・ディキンソンを目覚めさせたと言っても過言ではない。

### III ディキンソンに影響を与えた詩人たち

ディキンソンが読書家であったことは、よく知られている。その事実は、彼女の残した書簡の随所に垣間見られる。ディキンソンは、自宅の蔵書から数多くの作家や詩人の作品を読み、それらからインスピレーションを得て、詩を書いていたのである。この章では、ディキンソンが特に啓蒙を受けた作家や詩人たちについて取り上げながら、彼女の詩作にどのような影響を与えていたのかを検証していく。まずは、ディキンソンの人物像を語る上で、しばしば取り上げられる書簡の一部を見てみたい。

You inquire my Books — For Poets — I have Keats — and Mr and Mrs Browning. For Prose — Mr Ruskin — Sir Thomas Browne — and the Revelations. I went to school — but in your manner of the phrase — had no education. When a little girl, I had a friend, who taught me Immortality — but venturing too near, himself — he



never returned — Soon after, my Tutor, died, — and for several years, my Lexicon — was my only companion — (L 261 ; 25 April 1862)

この引用からも推測できるように、ヒギンズンはディキンソンにどのような書物を読んでいるのか尋ねたらしい。その返答が、この書簡である。特に括目すべきは、彼女が真っ先に「詩人」に言及したことである。第一に挙げた詩人が、「キーツ」と「ブラウニング夫妻」である。そして散文については、「ラスキン氏」と「サー・トマス・ブラウン」と「黙示録」だと述べられている。さらに、ディキンソンに「不滅」を教えてくれた「友人」<sup>6</sup>が亡くなった後、「私の辞書だけが、私の唯一の友達だった」と打ち明けている。この引用の後、ウォルト・ホイットマンについても若干言及しているが、ディキンソンが自身の読書歴を披歴しているのは珍しい。それだけに、この引用は非常に貴重な資料の1つと考えられるだろう。

ディキンソンはほとんど外出をしなかったので、友人もごく少なかった。だからこそ読書を愛し、想像の世界に耽溺していたのである。彼女が愛用していたウェブスター<sup>7</sup>の「辞書」が、「友達」として欠かせなかったのは、自分が詩を書く人間として重用していたことの証左である。ディキンソンはいつも「辞書」を傍らに置いて、その中から言葉を選び、詩を書いていた。

「キーツ」と並ぶイギリス詩人の中で、もう一人、ディキンソンに感動をもたらした詩人がいる。それは、同じ女性詩人として、当時、詩集を出版するために偽名さえ用いたとされる、エミリ・ブロンテである。エミリ・ブロンテはまた、『嵐が丘』の作者であることでも知られている。しかし、詩人としては詩集を出版するにあたって、本名を冠した詩集を出版できないという苦渋を味わったのである。それでも、エミリ・ブロンテは自作の詩を世に送り出したいと望んでいた。ディキンソンは、そのような先輩詩人の心意気に共感を覚え、詩人としての憧れをも抱いていたのだろう。例えば、親しい友人に宛てた次の引用の中で、ディキンソンはエミリ・ブロンテの詩をわざわざ引用している。

Did you read Emily Brontë's marvellous verse?

“Though earth and man were gone,  
And suns and universes ceased to be,  
And Thou wert left alone,

Every existence would exist in Thee.” (L 948; autumn 1884)

ディキンソンがブロンテ姉妹の詩集を読んだと推測できるのは、813 番の書簡の中に “Currer, Ellis & Acton Bells Poems” (L 813 b) という偽名を使用したブロンテ姉妹の詩集のコピーを、知人に送ったことが書かれているからである。このように、ディキンソンはエミリー・ブロンテの詩を愛誦し、気に入った 1 節は書簡の中でも書き記していたのである。そして、ディキンソンは、詩人としてのエミリー・ブロンテの生き方や詩風に触れることで、自らの生き方に大きな励ましと勇気を得ていた。言い換えれば、国は違うものの、この先輩女性詩人の生き方に、ディキンソンは影響を受けていたと考えられる。

ディキンソンが尊敬したとされる詩人や作家たちの中で、外すことのできない人物がいる。それは、イギリスの劇作家であり詩人でもあるウィリアム・シェイクスピアである。ディキンソンは彼の劇作品を愛読していたとされる<sup>8</sup>。シェイクスピアとディキンソンの読書上の出会いは、比較的早くて 14、5 才の頃である。例えば、書簡集をめくると、1845 年に書かれた 6 番 (7 May 1845) の書簡の中に、「シェイクスピアのティーボットの中の嵐」とあって、思春期の頃かおそらくはもっと早い時期から、彼の劇作品を読んでいたらと類推できる。彼に言及した書簡は数多くて、枚挙に暇がないが、晩年にかけても 1004 番 (summer 1885) の書簡の中で、「私の代わりにシェイクスピアに触れてください」と述べている。ディキンソンは、生涯にわたってシェイクスピアの劇作品に多くの影響を受けていたと考えられるが、特に影響力の強い作品を挙げるとすれば、『ハムレット』と『ロミオとジュリエット』であろう。たとえば、ディキンソンは実際、これらの作品についての詩を書いているからである。それは、“Drama’s Vitallest Expression is the Common Day” で始まる次の詩の一連を読めば明白である。

“Hamlet” to Himself were Hamlet —

Had not Shakespeare wrote —  
 Though the “Romeo” left no Record  
 Of his Juliet, (Fr 776, stanza 3)

ディキンソンは常にシェイクスピアを愛読していたのだろう。彼女がシェイクスピアを偉大な劇作家、詩人として尊敬していた。なぜなら、彼の作品に見られる言葉の力や表現上の技巧などに大きく啓発され、圧倒されたものと思われる。その一方で、シェイクスピアの書物が、精神的危機にある彼女を大いに慰めてくれたのである。例えばディキンソンが目の病気で辛い時期を過ごしていた頃、ヒギンソンが彼女について、「長い間目が使えなかった後、シェイクスピアを読んでなぜ他の本が必要なのだろうと思いました」（書簡 342 番 b）と証言するほどに、シェイクスピアの作品はいつも心の支えであり続けたのである。このように、シェイクスピアの言葉は、ディキンソンの心に大きく響いたのである。ディキンソン風に言えば、詩すなわち言葉そのものが「生きている」（書簡 260 番）のであり、本物の芸術作品として認める最高のお手本だったことが分かる。

ディキンソンの心を揺さぶった詩人は、自国のアメリカにもいる。それは、超絶主義者で思想家、詩人でもあったラルフ・ウォルドー・エマーソンである。エマーソンは、ディキンソンより少し前の年代に活躍したが、ディキンソンは彼の講演だけでなく詩集も読んだことが分かっている<sup>9</sup>。そのことを示すのが、次の引用である。

I had a letter — and Ralph Emerson’s Poems — a beautiful copy — from Newton the other day. I should love to read you them both — they are very pleasant to me. I can write him in about three weeks — and I *shall*. (L 30 ; 23 January 1850)

大切な人からもらったエマーソンの詩集について、“beautiful”だと形容している。エマーソンから影響を受けたと思われる痕跡が、ディキンソンの詩に散見される。自然論を扱った詩などがそうであるが、興味深いのは、「円周」という言葉をディキンソンが多用している点である。ちなみにエマーソンも、「円周」というエッセイを書いている。次の詩がその 1 例である。

The Poets light but Lamps —  
 Themselves — go out —  
 The Wicks they stimulate  
 If vital Light

Inhere as do the Suns —  
 Each Age a Lens  
 Disseminating their  
 Circumference — (Fr 930)

「円周」という始まりと終わりがなく無限を象徴する形のことを、詩の中にもうまく組み入れている。拡大していく「円周」には、限界がない。「円周」は、「詩人たち」がこの世を去っても、それはその自らの可能性を示すように際限なく拡大していく。ディキンソンは、詩という形式で、この「円周」のモチーフを活用している。エマーソンのエッセイにあるような考え方に、ディキンソンは大きく励まされたに相違ない。しかし、ディキンソンのこの詩を読むと、人間である「詩人たち」の存在はどこか稀薄である。だからこそ、最終行の「円周」の存在が際立ってくるのである。

このように、ディキンソンの書簡からは多彩な詩人や作家たちが登場しているのが分かる。このことは、ディキンソンがいかに読書に重点を置いていたかを提示している。同時に、特に書簡の中に出てきた人物たちから、ディキンソンが大いなる感銘を受けていたことも暗示している。本論で取り上げた以外にも、英米文学史上で重要な作家や詩人の名が書簡の中に載っている。それは、端的にディキンソンの読書量の多さを表している。言い換えれば、読書という行為の積み重ねが、ディキンソンの感受性の豊かさ、言葉の真意や行間を読み解く能力を鍛錬したと言っても過言ではない。こうした読書量の蓄積が、ディキンソンの詩作の宝庫となって、多くの作品を創出する原動力となったと言えるのである。多くの詩を書く一方で、読書を続け、その感動を書簡という形式で言葉に込めて、自分の文通相手に伝えようとしたのである。

## IV おわりに

これまでの考察の中で幾つかの書簡を読みながら、別の角度からエミリー・ディキンソンという詩人を捉えようとした。ディキンソンの書簡は、詩と同様にダッシュを多用するなど、受取人にとっては読みづらいものでもあった。また、ディキンソン独特の言い回しやメタファーなどが、書簡の中に混在しているため、英語を母国語としない読者には特に難解である。しかし、このような特徴がディキンソンの書簡をさらに、彼女の詩にも劣らない魅力的な特質を付与しているとも言える。そしてさらに、ディキンソンの詩を読むヒントのようなものが、現存する書簡には横溢しているのである。

ディキンソンの書簡は、特に彼女が読んだと思われる詩人や作家の印象が書かれていて興味深いものであった。彼女の読書体験が、彼女の詩人としての成長に大きく寄与したと考えられる。同時に、19世紀では、読書家たちの間でどのような作家や詩人たちが読まれていたのか、垣間見ることもできた。

ディキンソンが、本物の詩を見抜く方法について語っていて、それを聞いたヒギンソンが、次のように書簡の中に書き残している。

**“If I read a book [and] it makes my whole body so cold no fire ever can warm me I know *that* is poetry. If I feel physically as if the top of my head were taken off, I know *that* is poetry. These are the only way I know it. Is there any other way.” (L 342 a)**

ディキンソンの本物の詩を見抜く方法が、大胆な台詞として書かれている。「どのような火でも温めることができないぐらい冷たい」と感じられればそれが詩であり、「まるで頭のとっぺんが抜き取られたかのように」感じたら、それが詩であるという。分かりやすく言えば、本物の詩というものは、言葉で表しようがないほどに衝撃的で破壊的な感情を引き起こすものなのである。ディキンソンは、それ以外に詩を知る方法はないと断言している。言い換えれば、ディキンソンにとって詩の言葉の力強さが、判断の基準になると

言えよう。

ディキンソンの書簡は、彼女の大切な人に宛てたものであり、その大切な思いを言葉に託して、伝えようとした。ある感情が溢れだすと、彼女はすぐにでもペンを執り、便箋に言葉を書き連ねたのである。詩集の出版こそ断念したものの、彼女は生涯詩を書き続けた。次の引用の詩が、彼女の死後を予言するかのように、彼女の思いを代弁している。

This is my letter to the World  
That never wrote to Me —  
The simple News that Nature told —  
With tender Majesty

Her Message is committed  
To Hands I cannot see —  
For love of Her — Sweet — countrymen —  
Judge tenderly — of Me (Fr 519)

冒頭の「これ」、すなわち彼女が書く詩は、「私に手紙を書いてくれたことのない／世間の人たちに宛てた手紙」そのものだという。そしてその「メッセージ」は、「私が会うことができない人たちの手に」託される。だからこそ、「私を優しく裁いてください」と懇願するのである。彼女が「会うことができない人たち」とは、同時代の読者でもあり、未来の読者でもあるだろう。だからこそ、託した以上は読者の判断に任せるしかないと、ディキンソンは考えていたに違いない。すなわち、彼女の詩もまた「世間の人たち」に宛てた「手紙」である。そして、一方では、彼女が一目置く人たちだけには、書簡を送り続けた。時には、自作の詩も同封して、自らが詩人であることを伝えていたのである。こうして、ディキンソンの書簡は、彼女が詩人として歩んだ足跡をつぶさに示しながら、ディキンソンを知る貴重な資料として、現在も燦然と輝き続けているのである。

注

<sup>1</sup> Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols. by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1958).

<sup>2</sup> Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974).

<sup>3</sup> 小論では、ディキンソンの詩の引用は 1988 年に出版されたフランクリンの 3 巻本により、(Fr 700) と記す。

R. W. Franklin, ed., *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1998) 669-70, No.700.

<sup>4</sup> Jane Donahue Eberwein, ed., *An Emily Dickinson Encyclopedia* (Westport: Greenwood P, 1998) 139-41.

<sup>5</sup> 小論では、ディキンソンの書簡の引用は 1958 年に出版されたジョンソンの 3 巻本により、(L 330) と記す。あわせて、書簡に明記されている日付についても、(L 330; June 1869) と記す。

Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1958) 460, No.330.

<sup>6</sup> 「友人」とはニュートンという名前の青年で、ディキンソンの父親の法律事務所で働いていた。ディキンソンには、エマーソンの詩集のコピーを渡したり、詩の読み方や書き方を指導したりするなど、彼女に大きな影響を与えた。しかし、若くして亡くなった。ニュートンがディキンソンに教えたことは、後に彼女が自立した詩人になる上で、大切なことだったのである。そのことが、知り合いに宛てた、次の引用からも窺い知れる。

Mr Newton was with my Father two years, before going to Worcester — in pursuing his studies, and was much in our family.

... Newton became to me a gentle, yet grave Preceptor, teaching me what to read, what authors to admire, what was most grand or beautiful in nature, and that sublimer lesson, a faith in things unseen, and in a life again, nobler, and much more blessed — (L 153; 13 January 1854).

<sup>7</sup> *An Emily Dickinson Encyclopedia*, 305.

<sup>8</sup> *An Emily Dickinson Encyclopedia*, 263-64.

Judith Farr, *The Passion of Emily Dickinson* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1992) 132.

<sup>9</sup> *Letters*, 85.

## 参考文献

- Anderson, Charles Roberts. *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*. Westport: Greenwood P, 1960.
- Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading, 1836-1886*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1966.
- Crumbley, Paul and Eleanor Elson Heginbotham, eds. *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities*. Columbus: The Ohio State UP, 2014.
- Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1998.
- Eberwein, Jane Donahue, and Cindy MacKenzie, eds. *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays*. Amherst: U of Massachusetts P, 2009.
- Farr, Judith. *The Passion of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1992.
- Gilpin, W. Clark. *Religion around Emily Dickinson*. Pennsylvania: The Pennsylvania State UP, 2014.
- Grabher, Gudrun, Roland Hagenbüchle, and Cristanne Miller, eds. *The Emily Dickinson Handbook*. Amherst: U of Massachusetts P, 1998.
- Phillips, Elizabeth. *Emily Dickinson: Personae and Performance*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1988.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974.
- Small, Judy Jo. *Positive as Sound: Emily Dickinson's Rhyme*. Athens: U of Georgia P, 1990.
- Smith, Martha Nell and Mary Loeffelholz, eds. *A Companion to Emily Dickinson*. Malden: Blackwell Publishing, 2008.
- Stonum, Gary Lee. *The Dickinson Sublime*. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- 山川瑞明, 武田雅子編訳 『エミリー・ディキンソンの手紙』 弓プレス, 1984 年。
- ジェイン・D・エバウエイ編, 鶴野ひろ子訳 『エミリー・ディキンソン事典』 雄松堂出版, 2007 年。